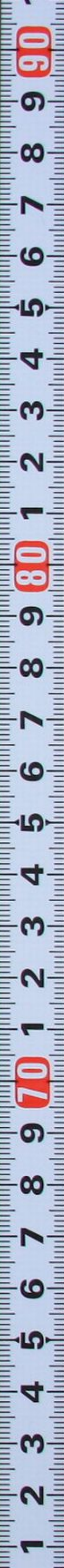


竹取翁物語

二



尾張小川  
宜之藏書

竹取翁物語解卷第二

飛驒高山 田中大秀 著



佛の御心鉢

猶<sup>ナホ</sup>こは女<sup>メ</sup>えで<sup>ヲ</sup>き<sup>キ</sup>き<sup>キ</sup>も<sup>モ</sup>あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>じ<sup>ジ</sup>よ<sup>ヨ</sup>ら<sup>ラ</sup>し<sup>シ</sup>ち<sup>チ</sup>み<sup>ミ</sup>と<sup>ト</sup>ら<sup>ラ</sup>ば<sup>バ</sup>こ<sup>コ</sup>こ<sup>コ</sup>こ<sup>コ</sup>  
あ<sup>ア</sup>も<sup>モ</sup>もの<sup>モノ</sup>も<sup>モ</sup>こ<sup>コ</sup>こ<sup>コ</sup>あ<sup>ア</sup>も<sup>モ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>コ</sup>ら<sup>ラ</sup>と<sup>ト</sup>思<sup>シ</sup>め<sup>メ</sup>ら<sup>ラ</sup>し<sup>シ</sup>こ<sup>コ</sup>

○此一條ハ五人の凡<sup>スベ</sup>くは意<sup>イ</sup>めて下五段の冒頭<sup>ハジメ</sup>なりとされば、  
天竺<sup>テンシク</sup>子<sup>シ</sup>ある物<sup>モノ</sup>なりともと云<sup>イ</sup>ふ故<sup>ユ</sup>石<sup>シ</sup>作<sup>サ</sup>王<sup>ウ</sup>天竺<sup>テンシク</sup>子<sup>シ</sup>二<sup>ニ</sup>と<sup>ト</sup>なき鉢<sup>ハチ</sup>なるは<sup>ハ</sup>  
え得<sup>エ</sup>ま<sup>マ</sup>じ<sup>ジ</sup>と<sup>ト</sup>こ<sup>コ</sup>天竺<sup>テンシク</sup>子<sup>シ</sup>ハ<sup>ハ</sup>往<sup>キ</sup>び<sup>ビ</sup>と<sup>ト</sup>て<sup>テ</sup>實<sup>ニ</sup>物<sup>モノ</sup>を<sup>ヲ</sup>見<sup>ミ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>ハ<sup>ハ</sup>相<sup>カ</sup>違<sup>ガ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>非<sup>ハ</sup>と  
鈴木氏云<sup>イ</sup>は<sup>ハ</sup>ま<sup>マ</sup>○不<sup>ミ</sup>見<sup>ミ</sup>で<sup>デ</sup>ま<sup>マ</sup>ハ<sup>ハ</sup>即<sup>ス</sup>え<sup>エ</sup>で<sup>デ</sup>ハ<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>意<sup>イ</sup>なり



漢律歷志云度者分寸丈尺引也又唐書百官志云度支掌天下租賦物  
產豐約之宣水陸道途之利歲計所出而支調之と云々度支二字共

子計意ハカなるハカバハカシハカトハカ云ハカ下シテの心ハカをハカのハカ用意ハカすハカ意ハカ子

て自オづクのハカ通ハカつハカをハカ按ハカタクミト云ハカ言ハカハハカ組ハカと云ハカ言ハカ上ハカ下ハカの一言

を左ハカしハカ是ハカをハカ右ハカしハカとハカうハカひハカてハカ思ハカ量ハカとハカるハカ糸ハカをハカ彼ハカ方ハカ此ハカ方ハカ取ハカ交ハカ  
して打組ハカハハカ似ハカつハカりハカ然ハカハハカタハカ字ハカハハカ元ハカ來ハカなハカくハカてハカ下ハカ組ハカもハカあハカらハカずハカべハカしハカ然ハカハハカ唐

此官名ハ度支と云ハカなるハカをハカ皇國ハカハハカ下ハカ上ハカ子ハカ支度ハカと用ハカゆるハカハハカ元來ハカシ

タクミト云ハカ言ハカの有ハカ子ハカ從ハカて字ハカと當用ハカゆるハカまハカくハカ定ハカハハカ沙汰ハカの字ハカを書ハカ

類ハカなるハカんハカ歎ハカさハカれハカどハカとハカやハカくハカ支度ハカと諸書ハカハハカ足ハカ今ハカ然ハカ云ハカバハカ下ハカ工ハカなハカく

の意ハカハハカ元來ハカ異ハカ支ハカなりハカのハカ古ハカきハカ諸書ハカハハカシハカタハカクト云ハカくハカミトを省ハカゆるハカ言

理ハカなりハカされハカバハカミハカハハカ術ハカなハカりハカ言ハカハハカ義ハカもハカよくハカ似ハカ通ハカひハカるハカ言ハカハハカなハカきハカバハカ委ハカ云ハカ置

らんハカともハカ思ハカはハカるハカなりハカ

く後人の考を待のこ○三年ごのりつゝい本子經てと云言なきと

今補つ此言なつてハ未だ結なつて聞えぬかゝて此三年計の間ハ

甚く忍びひく諸所方々佛鉢ハカハハカ似ハカはハカるハカ手物ハカを求ハカて歩行ハカせハカし

吏を畧ハカつハカりハカと心得ハカべハカしハカ○とほちれ郡ハカハハカ向ハカなりハカ和名抄ハカハハカ大和國

郡十市ハカ止保ハカと何ハカりハカ師ハカ記ハカ傳ハカ云ハカ十ハカハハカトハカヲハカなるハカをトホハカと云ハカハハカ地名ハカなりハカバ

後ハカハハカ訛ハカきハカるハカなりハカと云ハカはハカきハカ拾遺ハカ雜ハカ賀ハカ一ハカ条ハカヲハカ撰ハカ政ハカのハカ号ハカハハカ暮ハカバハカやハカくハカ行ハカて語ハカら

ず逢吏のやむちの里に住うりしをハカ遠ハカと云ハカ掛ハカりハカ○何ハカるハカ山寺ハカハハカ此ハカ何ハカる

ハ一書ハカ或人ハカなハカらハカぬハカ何ハカるハカなりハカ此ハカの詞ハカげハカらハカひハカぬハカさまハカ伊勢物語ハカ段ハカハハカ十ハカ子

鴨川ハカ乃邊ハカ子ハカ六條ハカニハカつハカりハカ家ハカをハカつハカかハカもハカとハカつハカくハカ作ハカてハカとハカるハカ似ハカる

と○びんハカづハカハハカ四分律ハカハハカ云ハカくハカ賓頭盧ハカ本ハカ此ハカ優填ハカ王ハカ臣ハカ由ハカ精勤ハカ故ハカ王ハカ放

出家得阿羅漢賓頭盧翻不動也以上請賓頭盧經子賓頭盧頗羅墮誓阿羅漢と有りて賓頭盧者字也頗羅墮誓者姓也と有りて感通傳子今時有作賓頭盧聖僧像立房供養亦是一途然須別施空座請一經子前置碗鉢至僧食時令大僧為受不得以僧家盤盂設之以凡聖雖殊俱不觸僧食器若身俗家則隨俗死設恐僧不知附此編出以上賓頭盧像の更ハ寂照堂響谷集卷三子道安法師夢見梵僧頭白眉長先此無安聖像至宋泰至末正勝寺僧法願正喜寺僧法鏡等始圖形矣此支ハ抄子引ゆる又僧ハ昔此梵僧の像を食堂なごに安て衆僧の食する時先此像を供養をし故子前に鉢を置つる形るべし○す付るとハ本子皆寸と付ると何きと校本子後と改つ墨ハ附べき所

子何く孫バ必煤なるべしスズキ煤付舊じくるうらげまスとさまなり  
 和名抄子唐韻云焔煤臺梅二音和名須灰集屋也古叟記大國主神杵凝烟  
 と書と○錦の袋子入つハ俊陞卷子琴を埋錦の袋子入つ一と  
 褐カチの袋子入つ一と錦のハなむ風かちのをバそし風と云清輔朝臣  
 袋冊子子節信能因子初節信能因子初自懷中錦の小袋を取出其中子錦屑一筋何カチ  
シテ示云是ハ吾重宝也長柄橋造之時の絶屑なりぬと甚多何う○作花  
 の枝子附てハ伊勢物語九十子梅の造枝子雉を付て奉る若紫卷子  
 北山僧都源君子金剛子の数珠を透る袋子入る五葉の枝子付る  
 大和物語三に京極の御息所より亭子院に御賀はりあつりぬと  
とて云捧物一枝二枝をさせて行へと聞えぬはり終バや多うり

古へ貴人の物奉るゝハ花など枝子附て奉しなり。藤井氏 勢語新  
云捧物など木枝子付るハ神佛又ハ人子奉る物ハ多し不置 釈五子

とくする更みく今世子臺に居て奉る同し意なきなり。○もて

来てハ古本もあつてきてゝも モチテト云ハ具なる也  
然云て聞苦しき処も有り

かゝるはるやうなり。神のゆふあつて  
ひらき  
るん

海山のまじりてはるはるのまじりて

たつたつたつたつたつた

○あやうりてゐるハ抄本とまじり下に同言近り終ハ悪  
し。得はすまじり物を見せると申す。其を得たりて

持来ぬひしを甚く不審と怪むなり。先鉢を足す。其の中  
る文と足付るなり。○海山のまじり第四句諸本ないしのとち扱

本おひの鉢と何と御石の鉢も歌などハみづの鉢と訓べき  
なりハ千は千字を血の涙子係てあり。濔標卷の乳母のつけの

別をいむか。思ふなり。初白乳舟を  
そつ。同し意なきなり。一首の意ハ天竺へゆく道百千万里の間

海をとり山をとり辛苦辛勞と尽きて其艱難ハ血の涙も流  
し。取来たりし身と云意も其御石は鉢を

詞を籠てよみぬひなり又按第三句は天竺ハ西の  
國を越ハ筑紫國を通りて遠く行けり由と兼る詞なり。

かきや姫いりやあると見えにホタル螢をとりて光るまじし  
かきや姫のひかりをいりて光るまじしと云ふは  
何れもあらずむとてかきや姫を

○光やあると見えは抄本に又見えにコ此ハ又見えにコの方勝を  
又、真の佛鉢は光あり其色青紺而光と水經注に又見えにコ更上よ  
引に○螢ハ和名抄に兼名苑云ケイ螢反胡十一反名ケイ熠上耀反入反和十何り  
○哥ケ於ケ露の光をいりて抄本にふりてを鈴木氏云一本に  
ぞと見え宜しぞと云ておしと結小格あり云々有へき更上と  
云意なり第四句抄本をいりて何り写本の字なきは後つをい  
らと闇き意に係り頭書に大和志に云く廢小倉山寺倉橋上峰ヲ跡

小倉山云即十市郡何り此寺ハ此物語造まる比名高く聞しな  
るべし一首此意ハ彼鉢を似せんと思オホさるオホバせめ露をいりて些少  
ある光をも宿して持ていりていりて心ココロ幼く暗クマキと名ありオホ負  
ゆる小倉山モトみモト覓モト求モト出モトし何故ぞとあり赫映姫小倉山寺  
より取来りて更ハ可知何れヒカリ無光ヒカリに付て小倉山より取  
来りていりて云るが按に當はるさまに語カタまるカタるべし○かき  
いりてを字類本に從て補つ姫より光もたし石鉢ヒツもヒツ實物ヒツお  
はる皇子のましまし所へ返し出きなるまかくて皇子鉢を受取  
て葉ハをいりて門カドを出りていりてを畧りりていりて此を字何ヒツを



神をかまます。此歌のかしさを

ふらふらとてはなれりかきかき  
ふらふらとてはなれりかきかき  
ふらふらとてはなれりかきかき  
ふらふらとてはなれりかきかき

○哥 白山ハクサンハ小倉山コクラヤマと云る子對コタガハシ姫ヒメの容貌カクシ色白イロシロくて光ヒカリあるを  
白山ハクサンと取成トリセるゆかり其光ヒカリの甚カギ々カギ逢オヒてハ氣壓キキをく鉢ハチの光ヒカリは消  
滅メす故ユとあり光ヒカリのうすい夜明ヨく燈火トウカの光ヒカリおく望月ボウゲツの空ソラは星  
み影ミカゲの又マタとてうめしさて門外カドノサハハ鉢ハチを捨てし若此ニシ鉢ハチの光ヒカリ現アて又  
取上トリゲルをもんと自己オノハ心ココロ頼タカを係ケるよしちり真物マコトモノなるぬハ固モトよ

光ハ无ナシくをなほほも光ヒカリ有アルよよ云イハなほほの無面ムオモなり鉢ハチを恥ハ  
みさくくすめり○とてみ入イりハ門カドより家内ウチノハいまはなちり  
て字古板本ジコイタホンは後ノチく加カつ○かきしもいハ普本フホンは後ノチつ写本シヤホンハ返  
事コトと有り下シタり歌ウタの返事カヒコトと何ナニと○いひてハ諸本シヨホンかきし  
ひとを誤アヤとして改置カクシつと後ノチハ類本ルイホンと云るまにひと何ナニと  
落凹物語ラクウモノガタリ 卷マクシハ女君メグミ男ヲもなちておとと左近少将ササキノシラノシラノ  
いひハとてとせはなれりかきかきと云イハいひとてとてとてとて居イ  
る程ほどもと有り○かきしハ万葉マンヤフ 卷マクシハよよ逢オヒて朝面アサオモ無美ムス隠カケ子コ  
の意イハ昨夜新枕サヨノイナして恥ハて翌朝アシタ面オモ隠カケ 又枕册マクシノサハ子コ抄セウハ主殿ヌシノミヤ司ツカサこそ於オを  
しものハあはれ年老トシノチく物の例タトヘなど知チておとしなますといひ

附~~~~目安しと何。李吟翁の注オキテツヨに於オキテツヨちまきハ面強オキテツヨく物オキテツヨまうてぬきむなりと云オキテツヨけり。鈴木氏云万葉なるハ言の本オキテツヨまオキテツヨく無面目オキテツヨかともオキテツヨ意オキテツヨなオキテツヨれども中昔の詞オキテツヨづオキテツヨのオキテツヨハオキテツヨ轉オキテツヨ變オキテツヨて即オキテツヨろオキテツヨまオキテツヨ云オキテツヨるオキテツヨ如オキテツヨく恥オキテツヨを捨オキテツヨてかオキテツヨふオキテツヨ更オキテツヨゆオキテツヨく俗オキテツヨまオキテツヨオシオキテツヨツオキテツヨヨオキテツヨウオキテツヨあオキテツヨつオキテツヨラオキテツヨ厚オキテツヨニオキテツヨなオキテツヨどオキテツヨ云オキテツヨ意オキテツヨとなオキテツヨまりと云オキテツヨけり。猶紅葉賀オキテツヨ卷オキテツヨまオキテツヨ源君源内侍オキテツヨ逢オキテツヨひオキテツヨ恨オキテツヨても云オキテツヨかオキテツヨひぞなき立オキテツヨかさオキテツヨのオキテツヨ引オキテツヨてオキテツヨ歸オキテツヨし波オキテツヨのオキテツヨなオキテツヨどオキテツヨりオキテツヨにオキテツヨ底オキテツヨもオキテツヨあオキテツヨるオキテツヨまオキテツヨとオキテツヨ何オキテツヨりオキテツヨ於オキテツヨもオキテツヨわオキテツヨれオキテツヨまオキテツヨやオキテツヨとオキテツヨ思オキテツヨれオキテツヨもオキテツヨふオキテツヨくオキテツヨはオキテツヨほオキテツヨどオキテツヨりオキテツヨなオキテツヨしオキテツヨとオキテツヨ思オキテツヨへりオキテツヨ内侍源君の面オキテツヨ厚オキテツヨなる物オキテツヨぞオキテツヨと思オキテツヨさんオキテツヨとオキテツヨ危オキテツヨ梅枝オキテツヨ卷オキテツヨまオキテツヨ兵部卿官オキテツヨ脚オキテツヨ大臣オキテツヨ御覽オキテツヨ驚オキテツヨぬオキテツヨかオキテツヨまオキテツヨどオキテツヨりオキテツヨハオキテツヨ思オキテツヨれオキテツヨぶオキテツヨまオキテツヨなりオキテツヨ書オキテツヨとオキテツヨ源オキテツヨ氏オキテツヨのオキテツヨ大オキテツヨ臣オキテツヨ御覽オキテツヨ驚オキテツヨぬオキテツヨかオキテツヨまオキテツヨどオキテツヨりオキテツヨハオキテツヨ思オキテツヨれオキテツヨづオキテツヨびオキテツヨろオキテツヨろオキテツヨまオキテツヨつオキテツヨまオキテツヨさオキテツヨらオキテツヨにオキテツヨ筆オキテツヨ投オキテツヨ捨オキテツヨげオキテツヨとオキテツヨやオキテツヨとオキテツヨ祈オキテツヨはオキテツヨらオキテツヨるオキテツヨはオキテツヨりオキテツヨかオキテツヨるオキテツヨ御オキテツヨ中オキテツヨまオキテツヨおオキテツヨちオキテツヨあオキテツヨくオキテツヨ下オキテツヨのオキテツヨ筆オキテツヨのオキテツヨ程オキテツヨさオキテツヨりオキテツヨとオキテツヨやオキテツヨちオキテツヨんオキテツヨ思オキテツヨはオキテツヨらオキテツヨるオキテツヨなオキテツヨどオキテツヨ戲オキテツヨはオキテツヨらオキテツヨるオキテツヨとオキテツヨも

是等コトハハサシを考コトハハサシて中昔コトハハサシの言格コトハハサシと知コトハハサシべし○恥コトハハサシを才コトハハサシつコトハハサシふコトハハサシ云コトハハサシらコトハハサシふコトハハサシハコトハハサシ写コトハハサシ本コトハハサシまコトハハサシよコトハハサシらコトハハサシつコトハハサシ諸コトハハサシ本コトハハサシまコトハハサシすコトハハサシつコトハハサシるコトハハサシとコトハハサシ何コトハハサシるコトハハサシ字コトハハサシハコトハハサシ術コトハハサシありコトハハサシ偽コトハハサシ更コトハハサシあコトハハサシらコトハハサシくコトハハサシ終コトハハサシまコトハハサシるコトハハサシ再コトハハサシ云コトハハサシとコトハハサシるコトハハサシ便コトハハサシもコトハハサシなコトハハサシまコトハハサシきコトハハサシ更コトハハサシなるコトハハサシに強コトハハサシくコトハハサシまコトハハサシるコトハハサシ哉コトハハサシなコトハハサシどコトハハサシ返コトハハサシしコトハハサシの歌コトハハサシよコトハハサシとコトハハサシなコトハハサシらコトハハサシくコトハハサシ終コトハハサシまコトハハサシるコトハハサシとコトハハサシ恥コトハハサシを捨コトハハサシとコトハハサシ云コトハハサシるコトハハサシなコトハハサシとコトハハサシ捨コトハハサシとコトハハサシハコトハハサシ不コトハハサシ顧コトハハサシなりコトハハサシ夕コトハハサシ貞コトハハサシ卷コトハハサシまコトハハサシ夕コトハハサシ貞コトハハサシ君コトハハサシ死コトハハサシくコトハハサシ源コトハハサシ君コトハハサシ御コトハハサシ氣コトハハサシ色コトハハサシのコトハハサシいコトハハサシらコトハハサシまコトハハサシきコトハハサシとコトハハサシ足コトハハサシまコトハハサシ終コトハハサシまコトハハサシるコトハハサシ身コトハハサシとコトハハサシ才コトハハサシつコトハハサシ行コトハハサシまコトハハサシ身コトハハサシとコトハハサシ不コトハハサシ顧コトハハサシなりコトハハサシ今コトハハサシもコトハハサシ人コトハハサシ目コトハハサシこコトハハサシらコトハハサシくコトハハサシ恥コトハハサシを不コトハハサシ思コトハハサシ心コトハハサシの欲コトハハサシあコトハハサシらコトハハサシに物コトハハサシすコトハハサシとコトハハサシ然コトハハサシ云コトハハサシまコトハハサシ鉢コトハハサシとコトハハサシ恥コトハハサシとコトハハサシ同コトハハサシ言コトハハサシ清コトハハサシ濁コトハハサシまコトハハサシハコトハハサシ不コトハハサシなコトハハサシるコトハハサシまコトハハサシ後コトハハサシて恥コトハハサシを捨コトハハサシとコトハハサシらコトハハサシしコトハハサシ言コトハハサシの起コトハハサシを説コトハハサシが如コトハハサシまコトハハサシ上コトハハサシまコトハハサシよコトハハサシぞコトハハサシいコトハハサシ下コトハハサシまコトハハサシ何コトハハサシへコトハハサシなコトハハサシしコトハハサシかコトハハサシいコトハハサシなコトハハサシしコトハハサシの類コトハハサシをコトハハサシぞコトハハサシとコトハハサシ何コトハハサシへコトハハサシ因コトハハサシ縁コトハハサシ物語コトハハサシをコトハハサシしてコトハハサシ一コトハハサシ與コトハハサシとコトハハサシもコトハハサシるコトハハサシありコトハハサシ忠コトハハサシこコトハハサシらコトハハサシもコトハハサシれコトハハサシ卷コトハハサシまコトハハサシ故コトハハサシ左コトハハサシ大臣コトハハサシの北コトハハサシ方コトハハサシ千コトハハサシ葉コトハハサシ大コトハハサシ臣コトハハサシまコトハハサシ孫コトハハサシ想コトハハサシしコトハハサシ恥コトハハサシを才コトハハサシつコトハハサシ云コトハハサシ出コトハハサシせコトハハサシとコトハハサシ嫌コトハハサシなコトハハサシりコトハハサシまコトハハサシハコトハハサシ自コトハハサシ文コトハハサシ參コトハハサシまコトハハサシるコトハハサシ處コトハハサシまコトハハサシ也コトハハサシ中コトハハサシ納コトハハサシ言コトハハサシの子コトハハサシつコトハハサシちコトハハサシ右コトハハサシ衛コトハハサシとコトハハサシ終コトハハサシりコトハハサシてコトハハサシ落コトハハサシ凹コトハハサシ物語コトハハサシ三コトハハサシ門コトハハサシ督コトハハサシはコトハハサシ許コトハハサシまコトハハサシ參コトハハサシらコトハハサシるコトハハサシをコトハハサシ越コトハハサシ前コトハハサシ守コトハハサシ大夫コトハハサシなコトハハサシどコトハハサシ唯コトハハサシ

今の死なむが恥を捨て參仕まつふたのちかめ

道兼おむのえい

来持のいふこいふむごころの何人までおんやけのハ能紫國より海あ  
らにまゝいふまゝいふまゝ申てかぢら姫のおうい玉のなとらまふ  
まあのものといふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝ  
能波までたくりしけりまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝ  
いふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝ  
いふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝ  
いふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝ  
いふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝ

○心もどりの古史記 大國主神根國 御祖命告子云可參向須佐  
行まの条

能男命所坐根堅洲國必其大神議也大なりまほと何る傳ふるぞこのハ唯とら

るなりと云はれり又 香椎カシヅメ權カシヅメ字書カシヅメ字を自然訓下子安貝の段カシヅメいふぞ

うと申さん又何カシヅメくもごころて伊勢物語七十七段カシヅメ大将出くるぞこの

まはふや。空蟬カシヅメ卷カシヅメ源君小君カシヅメ宣言カシヅメまはふや時カシヅメと見え對面すべくも

ばうはと宣ひひるはれりまを師の講説カシヅメサリヤクシコシラヘルな

まといふ縣居翁カシヅメはるごころのりハ手して物を量より發カシヅメて心カシヅメに議カシヅメするも

云くやうなるはれりといふ契冲法師カシヅメハるふるふるすと云類カシヅメもくまの

ると云言なりといふはれりカシヅメ師カシヅメハ此説を取カシヅメはれりカシヅメ伊勢物語カシヅメなるハ右大

將カシヅメ山科カシヅメの禪師カシヅメハ皇子カシヅメ始カシヅメ見カシヅメはれりカシヅメ唯カシヅメなるやハ有カシヅメべきや

千里濱カシヅメの石取カシヅメ遺カシヅメはれりカシヅメ更カシヅメなるはれりカシヅメ此カシヅメハ姫カシヅメを欺カシヅメ思慮カシヅメ工カシヅメるぞ

ておもしし石作皇子のまじりみり同じ○於不やまのハ云ハ朝廷子  
暇を賜ちる子ハ浴湯みと申立赫映姫子ハ蓬萊みやせつと私を  
漕歸て玉枝つとせ給ふ更をよく書調ゆる文甚めつと○筑紫  
國子湯浴子ハ九國の内温泉ハいつとるまづし海を隔ゆる所なり  
て今附ししあゝ給ははつとつと偽ひひしなり。万葉卷六子大伴卿  
宿次田温泉湯の原子鳴芦鶴の我如妹散木集悲子帥大  
經信卿薨後の処子寄て浴す後ふなる給ゆる足なをす悲ぎけははつとつとよめ  
の涙も共子涌返るゆ和名抄子筑前國筑紫乃三知乃久知御笠郡次田訓と  
夕夕り散木集子すつとつと音又肥後國山鹿郡子温泉郷あり又  
便なり正しくスキタと訓つ

三代實録卷四子肥前國温泉神に進位別離源のま  
祢の筑紫子湯あつとつと罷らふ時子と詞書あり當時名高き温泉  
有しなるべし○とつとつと筑紫を差難波子下給ふなり○仕  
あつとつと人子ハ皇子ハ皇子の格み供奉す人子数多なる  
を難波まで送らきて忍給ふ御旅なりと省きやつと御供人大  
概ハ京子返し給ふなり○みてハ師記傳云寧とハ身子添へ付ると云  
と云ゆとハ身子副子行なりひきかハ引從ヒキシタカつと身子そふなり  
と云給き○近し仕まつと限つと出給ひぬハ抄本みめてと何處と上  
にゐておとしまとつと何給ハ此ハ出とつとよに仁徳紀子近習舎  
人武烈紀子近侍舎人とつとをチカク仕ツルトネリと訓と此も舎人



ひつらのハ一と書て字音イキと呼ぶ意を未得者の誤てひ  
つらと写さるなり類從け異本にハ一のと作り第一の意なり。あ  
らハふくことくを引写誤るなり。摂政關白を一の人と申きり  
職原抄に執柄必蒙一座之宣旨故称一人月宴卷貞信公豊廿中の  
更を實頼左大臣号小野官貞仕まつりぬ九條殿師補公貞二の人  
干時右大臣みみゆみゆ猶一と二の人を思聞えさせゆめふ。  
沙石集に光明峯寺禪定殿下鎮西に圓爾房を請じ登きて東福寺を  
建立ありて聖一和尚とて師弟に義於り日本國總講師に成し  
ふてまつり思食りり其故に聖一と云名ハひびくものつらと思  
食されて附つけたるもの云に繪合卷源君の琴ひのきぬふりな

イチのぎえりて次は横笛など何れ是等より第一の意なり。上若菜  
卷に御装束限なく清らと尽して名高き帶御佩刀など云古世のひ  
つらの物と名何れ限ハ皆集い參る御賀にあや有らるとあるハ按  
是ハ古代殊一改ありて名高き物と云更なるべし孟津抄にひ  
つらの物ハ天下第一の名物なりと云ハいつの第一の意なりハ必  
くこと此コ異なり○言もあつハ諸本うちこ古板本かぢ  
工と何れ和名抄に内匠寮宇知乃多久美乃豆加佐と何れハ其の  
思ふ然らば又古板本ハ鍛冶工のと聞ゆれど誤り此ハ必  
ちあらつとをさつととをふ誤るかちふとをさつと  
写誤るなり内麻呂ハ工匠の名なり次下○人より来まじまい  
へを造てハ荏野冊子イハ家と屋とハ差別ハ委しく辨置つと可考

○かまへと二重よきとてハ諸本かまへととハ下よとと  
よよりて竈カマドなんと思ひ誤アヤれ。構カミと三重ミエよ爲籠レコてと  
聞キち改改カキつ。字書ジショよ構架屋コウカヤ也又結起也とて家屋イタクヤを經營イソナム意イ心  
を用モト己オノと固め敵カキを防カキぐや。お意ある言なり。古語拾遺コゴジツイ 檀原タンゲン宮段ミヤノ構  
立正殿タテマサノ落凹物語ノコト 卷マキ二 女君部屋の内メノ典某ニツギ内ウチぎし差サシこも  
と思オモて万マンよ何ナニくまマきやヤよかカよヨ云クニ宇治拾遺ウヂノ 十トウ 頼信上野守タノシノノ  
忠恒チカノとト入海イリウミ乃遙ノトヨシ差入サシる向ムカ家カを造ツクて居イり此海コノウミの終ノヘ  
子廻コノてよせセバ日頃ヒノケへヘむ其間ミケ子逃ニゲし又寄ヨセらレぬ構コウもモき  
なる今日コノヒの内ウチよよせてせめんセメとトなり。此も垣カキと三重ミエよヨ寄来ヨリキを  
人を防カキくなり。吹上フクエ、卷マキ子コ 種タネ杏ノの家ノ 四面シメン八町ヤチマチの内ウチ子三重ミエは垣カキをし

三のほひをすまうりとも同しとありて。○皇子も同所ドウジョに籠  
ひひハ御心を尽ツクしむムしシなり。○きキまマひヒハ限十六リミそハ  
かカまマへヘとト何ナニけケハ諸本皆同じモトモトにニかカまマへヘとト何ナニけケ  
と云言クニつツのノ決キめて誤アヤらレし上ウ子コかカまマへヘとト何ナニけケハハ和名ワナ抄セウ子  
四声字苑シシヤジエン云クニ竈カマド則到ソツト反ハとト躑シ同トウ和名ワナ加カ方カタ炊ヒ爨ソウ處トコロ也ヤ文字集畧モンジシツリョウ云クニ竈カマド七ナナ下ゲ  
紅ベニ反ハ和名ワナ久度クダ竈カマド後ノチ穿ス也ヤとあり我里人ワガサトハハつツひヒとトどドとトつツりリ也ヤ  
きキるル説セツハ由ユなナしシとトもモひヒハハ限十六リミそハ此皇子コノミコの知行チカヨリハ莊園シヤウエン  
十六ジュウロク死シと云クニ吏シとゆユわワはハ其莊シヤウより出デくる物成モノナリと玉枝タマエ造ツクらレせセぬヌ  
費ツヒとてと云クニ吏シなるべベりリもモ誤アヤ字ジ脱ダツ字ジ多オホクくて聞キる難ガタシきキなるルし  
かカまマへヘとトハハ倉クラ子コ納ノるル稻イネなナとト出デし  
其費シノツヒとすス吏シのノ嵯峨院サエエノ卷マキ子コ 政頼セイライ左大将サダマシ神カミ 何ナニもモ食クハなナのノてテハ  
余オノしシぬヌ處トコロ子コ 何ナニもモ食クハなナのノてテハ

美作より米二百石奉りてあり伊余の御封御莊に物もをてまゝて  
來りぬれば其炊てこと仕まつてすべし藤原君卷子 上野官童  
傳打子物  
賜画の様御倉開て家司ども何限の物どもを運び出して此人ど  
書る處に 宇治拾遺 卷六 帝釈夫留志長者子化 物各む神を祭る驗  
りたる 六 して人子物与る處に 信貴山飛 大なる何ぞと  
みや其神放る物の杏のねわかするぞとて藏どの何何させ  
て云宝物を出して配とてきりぬば云 倉の處 又 大なる何ぞと  
ぬるを開て物取出るにむとある如く倉を開てと云るが如し  
又落凹物語 卷中納言三条の家 何とてち我等が住まぬ子いと廣  
くよとて云て二年ぞりり子出くる莊の物と尽して築土より始  
新しく築あらして古杖一交へば大更みく作をせぬ 卷三子右  
衛門督に

家々多の物を尽して造るるついでに云々思へ  
し是ハ若後人お考の助もあつてそのとて自己の憶説と記しつる  
みちのま○玉枝と造ぬハ先一とつり云とちめて次子又其更を委  
云文法なり續古事談に一條院圓融寺に御幸ありける内裡より  
院の御送物瑠璃の香呂金の御珠数箱銀乃紅梅お枝に鶯の居る  
に附けぬりりりり 如此類の物作物所 仰て作をせぬふる  
るべし○かぢや姫乃つよふやとるふがくび作してハ古本にい  
づとるふよし上子白銀を根とて黄金を莖とて白玉を實としてと  
云るよふのくびなり漢武故更り神屋前庭植玉樹珊瑚為枝以碧  
玉為葉或青或赤悉以珠玉為之子皆空其中如小鈴鎗有聲抄とる



其造物も此に同じ

いふか〜〜〜〜〜  
かかりぬまらりや殿ノ告ノやうて〜〜〜  
居ノまらりむらり人ノまらりまらり〜  
いま〜物ノみかひ〜持ノまらり〜  
〜〜〜  
聞ノ〜  
○か〜〜〜〜  
此鮮ノ上ノまらり人知ノず〜  
そら〜云ノこ〜とひと通ノ〜

○か〜〜〜〜  
此鮮ノ上ノまらり人知ノず〜  
そら〜云ノこ〜とひと通ノ〜

勢物語段五にみ〜の形ノ所ノなれバ門ノ〜りもえつ〜  
所と云ノ更ノ〜歌ノに人ノ〜  
る玉枝ノを難波ノ人ノ〜  
示ノし〜  
殿ノ告ノやうて〜  
受ノれ〜  
菜ノに行ノゆ〜  
苦ノし〜

所と云ノ更ノ〜歌ノに人ノ〜  
る玉枝ノを難波ノ人ノ〜  
示ノし〜  
殿ノ告ノやうて〜  
受ノれ〜  
菜ノに行ノゆ〜  
苦ノし〜  
悪ノ〜  
○迎ノ人ノ多ノ〜



姫すえきまらぬしとくしとく入らり此むはるるに  
ほぐりけり

かすいぎつあまのあまの玉のこゝろを  
かすいぎつあまのあまの玉のこゝろを

○於くさしとある二所のあし類本は従つ補つかく同言を  
きつり重て云る此物語の文体あり○あひまてよつる翁の出  
て皇子は對面し奉る形り○をちて来りよていとある本も  
あり上<sup>十四</sup><sub>下左</sub>にみて出ぬ又もちて登るる二様は云を聞よれ方は従  
づ。とて下子云くしりてとあはは寫本の元子後べくゆわは  
と諸本の有<sup>上</sup>従つ○奉るるといへば皇子は御上を云地り言よ

と此もノタマハバと訓げし○命を捨てハ歌のいづけに身ハあし  
つゝもと云る即命をすつと云ふ同じ玉枝とて身命を不顧<sup>ナクシ</sup>  
しと云更なかり○翁持て入らりハ玉枝を姫の居所へ持入なり○文  
をぞハを字校本は後<sup>ハヒ</sup>加つ○哥いづづよ玉のえとハ抄本  
後つ寫本はえとをハとらし梅枝巻花のえといひし心をさ  
るかな人のゆさゆ香をばはくめと。真木柱巻かこのとの風も  
もはてよ花のえよ立並べき白なくともと何を證とつ。さしに  
と寫本ハるがよとを其も悪うづ一首の意ハ未玉枝を採得るま  
まぬ<sup>サキ</sup>前の意よ如此志と剛<sup>ツヨク</sup>立<sup>タ</sup>辛<sup>カラシ</sup>と採得し由をせつらん  
とて枝よ付けり○是をよ何ぞとてをよハ赫映姫も

此玉枝ハ眞実其物と思てかくまで皇子の心を尽し給ふ更と何と  
 此を奉とさきりて逢す。己身をし何まばつものりともんと大く物  
 思居る上子翁の玉枝と実物と思て走入り返更を催促ありをもと  
 云る次の翁の勧め催促すに當まる言なり○於てしまれと云るや  
 古事記 高津に吉備國行カレ 尔黒日賣令大坐其國之山方地而云とある  
 傳 廿五、四十一 子坐ハニシニスと訓て上のニシハ坐字は何なりて居賜  
 云るや下下のニスハ附云崇辞と賜と云類なり さてニスとタニフと  
 其更後と差別 ハ似たる崇言なれ 於てしまれと云ハ大のホと省き於てしまれと  
 あり混べりす オホ 大のホと省き於てしまれと  
 云ハホマの切ハとなれるなりと有り大ハいつく崇て称奉る辞也  
 是ハ上子云べきを  
 書漏して此に載つ

竹とちねおとさきりて逢す。己身をし何まばつものりともんと大く物  
 思居る上子翁の玉枝と実物と思て走入り返更を催促ありをもと  
 云る次の翁の勧め催促すに當まる言なり○於てしまれと云るや  
 古事記 高津に吉備國行カレ 尔黒日賣令大坐其國之山方地而云とある  
 傳 廿五、四十一 子坐ハニシニスと訓て上のニシハ坐字は何なりて居賜  
 云るや下下のニスハ附云崇辞と賜と云類なり さてニスとタニフと  
 其更後と差別 ハ似たる崇言なれ 於てしまれと云ハ大のホと省き於てしまれと  
 あり混べりす オホ 大のホと省き於てしまれと  
 云ハホマの切ハとなれるなりと有り大ハいつく崇て称奉る辞也  
 是ハ上子云べきを  
 書漏して此に載つ

○翁走入り上子翁持入り入りと云る又走入ると云言つる  
 聞わめり始持入りし姫の前より出きし乃となり然を速に答き孫  
 ハ翁ハ実物と思て何れハ返更催さむとて走入りなり○一の處  
 此ハ諸本とてを又を字无もありをハもの誤と見われバ改

て補つ○何や〜の類本有と以て補つ。是ハ疑カキ  
よし形り○あやま〜びハ不令違と云意なり。桐壺卷子更衣卒去後帝の御詞  
故大納言更衣の父の遺言何やま〜び宮仕の本意ふ〜物しふり喜喜  
ハかひあ〜思渡つ〜のいす〜何〜上更衣の母  
乃勅使へ 故大納言今ハ〜なるまで只此人を宮仕の本意必遂させ  
申詞子  
なほ〜此遺言と〜は〜出立し立寄りしと〜何  
る更なり○何をもちて〜ハ抄本子も字なま〜し〜字諸本子  
なま〜今補つ必有べき処なり○や〜申べきにあ〜ハあ〜  
は四字諸本子死ハよく聞かれ〜類本の有〜後つ。何を以〜と句  
〜と〜申べきと云言一省て次子云改ゆる趣なり○我御家へ

ハ抄本御字なし。落凹物語卷子ハ講乃我御殿〜と〜んと於  
不も〜若紫卷子我御罪はほどお〜〜何り○何ひは〜  
まつり〜あひ〜と云更相思相戦な〜ハ物と互にす〜意あり伊  
勢物語段廿三子相思と〜ハ相思の反〜我ハ思〜彼方ハ思  
ぬなり下天羽衣の段子相〜のい〜心もな〜何り自他相思  
自他相戦あるを今世の詞子相濟不相替なりといと多〜遣ハ唯添  
〜言りて意なしと聞也。宇治拾遺十増賀を戒師子 年より寄  
〜風重〜成〜参〜候〜と態と召〜相構〜候〜と  
何〜ハ對〜處〜今世は相濟不相替子似〜古代も唯添〜  
云は〜の又逢てのて字と脱き〜思〜狩〜何〜語の

調心心ゆのげゆわめり又按即相思の類ゆ翁の詞より仕奉  
 るや云べきを聊姫を傳て皇子と相互よと云意を控含め相  
 と云るは未さぶと之守○物もいとげハ抄本は後諸本は  
 てとるもよるし○はつづまハ俗はほ杖も臂杖も云は  
 ほなり。和名抄に野王按云頰タケ音挟和名豆良一云保。面旁目下也ととも甚  
 物思す時頰手と掛腕と杖とと打つてつきなるなり。枕冊子  
 九は如意輪ハ人の心をおろし頰杖をほきてたハよる廿五  
 らひあはれよ恥し。伊勢集屏風夜一夜物思つる女の夜もすの  
 をおも思ふ時のほつづまハ腕カタぶるささきとほぢぢぢ  
 意は係 ○たひひつらハ抄本ハたはとるなり

此を今もさし何うさうはげうんといふまゝにふん  
 のりりぬぬぬこころやうやふ

○さしハ諸本さしとるを誤て終へに縛カタなり故改つ  
 ○何うや云べうハ彼是と論ハ不及と云意なり○云あまハ  
 隨ての義もく俗直ナキにと云すの如し。上ハ何をもちてうやう申  
 べきと翁の云るをゆく其詞をふの縁エ上ゆなり○えんハ  
 和名抄屋宅唐韻云檐エハ余簾反字亦作ヤキ屋檐也。又文選注云飛簷ヒエハ  
音比棟頭似鳥翅舒將飛之状也とあはバえんハの記ハ字音を取  
 るもく柱より外の板敷簀子イダシキスノを云なると思しハあは鈴木氏云  
 えんハ今も云えんなり縁字なるへしと縁エの意なりと云は

下學集家屋子縁ニ板敷也と云々りすねとも板敷とも云

しなり。和名抄屋宅具也蔣勳切韻云箆音責切程式板敷箆子須乃古床上簾竹名也

何るハ古代の縁ハ箆子を張ハ板敷ハ狩古の名を用て

すねとも云し由を云るなり。落凹物語卷左近少将凹君の許格

子のをよに奉テ留守のハゆるやえはくると已カもハ箆

子ハ君乃ハ格子を木の端ニくハ放チ押ハ

入ぬる。伊勢物語段何ハ板敷ハ月のうハぐハまハふハ

とてハ格子ハ外の縁ハ大和物語良峯宗貞少将五条邊みく雨ハ逢

と或女の家ハ男縁ハ上ハあぬハ簾の内ハよりハ出ハ

よハ居ぬハハ此皇子のハ思ハハ

ハ師記傳波比岐神の下ハ云ハ入ハ歩ハ今ハ入ハ

と云是ハ間ハの処ハ歩きハ行ハ源氏物語

内ハ彼ハ來ハ後ハ虫ハ行ハのハはハ

ハ云和名抄蚊虫ハ行ハ也ハ波ハ虫ハ甚ハ小ハ物ハいハの

此程ハ歩ハ行ハ物ハなるハ故ハ云ハ又ハ人のハ俯ハ伏ハてハキハ

足ハ行ハとハ云ハ字鏡ハ匍匐ハをハ波良ハ是ハ遠ハくハ得ハ行ハまハぬハ物

なるハ脚ハの間ハを行ハ意ハよりハ云ハなるハ此ハ俯ハ伏ハ昆ハのハ意ハハ

みハ坐ハとハ歩ハ上ハとハ未ハゆハをハ推ハとハ上ハ

ぬハよハしハぬハ○ハこハりハ思ハハ我御家ハ寄ハぬハ旅ハのハ御装

束ハのハ坐ハとハ逢ハとハ上ハとハをハ有ハべ







ある人も世に出かゝる物なりなりとあざすにまぐ目と驚の  
しゆふ夕貞卷の体と人のけをひ甚何ぞや柔に於て  
師云柔に於てまふも更れ甚しきと云る詞なりと云  
れは是も源君のかけて思しゆりも殊外柔なるなり。赫藤壺卷に  
上東門院十二より少いも更れ更れ何ぞすままでおとすひ  
く入内の更と。少いも更れ何ぞすままでおとすひ  
さをもつり。宇治拾遺卷の瓢子思おけひあましと思く何ぞ  
はく嬉しけまはなを考まひべし。○福を思はるといへ  
と猶翁の内の内ちつひなむの諸本福を思ひ翁ハ云とあり  
かく七字と不補のハ文不通始はるといへど聞も不入と補つるを  
本居翁きつるもいまひと云意を猶の語ももせて畧つるも宜の  
らむと云はしむ従つるを今傳ると補つるに付て上りなるの辞を

加つ本居翁も既く文の脱つりしと知く詞を補置つと云遣はれは斯  
く大概の聞やめ終と於不足心ちハすなり○福を思ひと  
言なり古事記宇伎由比の段は其神之嫡后須勢理毘賣命甚為嫉妬と云く  
字書に妒都故切同妬同妬説文婦嫉夫也詩注以色曰妒以行曰忌と見え終  
ど物語文の類々の俗のクチラシ或ハ残念なと云意と聞えり。帝  
木卷中川宿もく空蟬と小君福あけけ云て顔引入つる声に福  
も心留ても聞きけり。又空蟬源君人子不似心状の於きも立  
登らるも福を思ふ人子不似と源君子不靡女ハなまき  
ハ家屋を構へ座席を取繕などすと云と帝木卷に官腹の中將ハ  
云里もくも我方のちりひまはゆくして夕貞卷源君六条何の  
の院子至終

如御車入させ西對御座オニシやとよまふ云ス禊スガヒいこ經營ケイエイしあり  
く假そめたるは清くきつひるりともハ御簾のけりし几帳  
褥クサちと設セよすふまままり

翁オウこにあいくやういのちる所の此ハとしつらひさま

○いのちる所ハ致ハ蓬來山中ハ何カまあぬ所ハ何カと問へるなり  
○是でしたものみは下ハ有カ哉と云言を畧ハり

皇子ミコこらぬく宮はままくくゆきしの二月十日ころハナニ  
龍リウ波ハより船にありし海中にいてゆの身方もせつびお  
不えしのど田オモフコトハせおたのういまて何カのき

あい田の一のばいまはぬく宮はままくくゆきしの二月十日ころハイナチ  
ぐいのいまはぬく宮はままくくゆきしの二月十日ころハナニ  
くいのいまはぬく宮はままくくゆきしの二月十日ころハイナチ  
らいのいまはぬく宮はままくくゆきしの二月十日ころハナニ  
らいのいまはぬく宮はままくくゆきしの二月十日ころハイナチ

○さをしし校本ハさつししとをしし一昨年字ハ万葉四  
前年と書又六ハをとつひを前日十七もなるを猶又其前年とさせ  
平登都日とを六帖ハ一昨日と作は  
させハさを省る言なるべし万葉卷四前年之先年從今年まぐ  
意は何カ妹ハ逢ぐまと何カ俗ハるにサキヲトシと云  
平春海翁假字大意抄云前年の更を平止と志と云平登都日の平登と  
全同語と見える是と平の假字を定るなりと日ハをちつ

日ヒをヒしハをヒしハなり過去ミキし方を差てをヒと云ハ遠近トホを  
ちチちチなナと云をヒちチめメくクとトちチと通言ツなりハ其義疑ヒべき更ヒ非ヒび  
をヒちチハ其語の本ヒ彼ト物を差て云言ハなりハの自オらラ遠トきキ音ネあハれレど  
遠トきキ更ヒをも過去ミキする方ハをも云ハなりと云ハれレきキ万葉六の廿子子前前日日毛毛  
昨日キ日日毛毛今日キ日日毛毛又又つつままづづもも云云又又十七十七山山の峽峽もも見見ええびび平平登登都都  
日日毛毛ききけけふふももりりふふもも雪雪の降降ままんんとと是是より以下以下の詞詞ハ徒徒身身ハ  
ななららずずもも云云の歌歌とと云云なりなり○二月十日二月十日ハハききささづづぎぎの  
ととををああとと訓訓べべしし○海中海中ハ古板本古板本海海の中中とと云云ハハ悪悪ししの字字ももくくて  
ううここちちののとと訓訓べべしし其更其更ハ下下龍首龍首玉段玉段云云べべしし伊勢集伊勢集子子  
長恨哥長恨哥屏風屏風子子后后ににああららるるとと云云べべしし○思思  
ててももべべししもも云云の船船ももななららずずもも世世を海中海中に誰誰ののとと云云しし○思

事事ななららずずででははいいハハ字字写本写本子子後後くく加加つつ○唯唯むむななららずず風風子子下下ののせせいいハ  
何方イッナを差差て行行べきべき據ユスガももななららずず空空にに憑タりり風風子子從シくくそそとと云云  
ああととなくなく漕行漕行みみゆゆ由由なりなり○生イキててああららずず限限ハハ写本写本子子後後くくハハ字字をを加加  
つつ○波ナミ子子漂ウツるるゆゆりりききいいハ諸本諸本海海子子漕漂漕漂何何もも云云本本波波子子云云とと  
あり校本校本子子後後くく改改つつ海海子子漕波漕波子子漕漕ととててハ語語をを不成不成○我國我國ののううちち  
をを離ナててハ外海外海大洋大洋子子出出るる由由なりなり○ありありききああららずずししハハ古板本  
よりよりりりとと云云ハハ罷ハりりとと云云ハハ誤誤なりなり類本類本子子後後くく改改つつ抄本抄本此此三字三字なしなしとと云云て  
ままははるるとと云云ハハ二様二様ありあり物物をを中中みみしてして回マるとと又又そそとと云云ものものとと云云ははくくまま  
とと云云なりなり佛足石佛足石碑碑の歌の歌子子此此御跡御跡をを麻波利麻波利ままつまつまままづまづまとと云云ハハ佛跡  
をを中中みみしてして巡メ回回なりなり宇治拾遺卷子子一庭一庭ををままささららずず舞舞とと云云るるんんぞ

こころのとれく庭中と歩行フリキおそるなり此も其子同し○鈴木氏云此皇子の答は詞同様の更カキに重なりつゝハ口クチ子任ニヤミつゝ虚言の躰サマなりと云はば按サシ此に生ナて何ナニもきんと云イハふ又命死キむいハハきん又あマまシと云言イハ徒タラ子四重ツなり次條子海底ソコも入イぬべク海ウミ子紛マギまシき鬼オニの様サマなる物モノ動ユくはげハなる物モノ草根クサネと食物シヨクとトき貝カイを取トる命イをシげクなシと重カなりシり

或アルキ時トキハ波ナミあハせテ海ウミをシるコトもいハぬベくハ風カゼにヒけテくシぬベくハ次ツよシせテ海ウミのオもト物モノをシるコトもいハぬベくハ或アルキ時トキハ口クチ子任ニヤミつゝ海ウミをシるコトもいハぬベくハ命イをシげクなシと重カなりシり

或アルキ時トキハ波ナミあハせテ海ウミをシるコトもいハぬベくハ風カゼにヒけテくシぬベくハ次ツよシせテ海ウミのオもト物モノをシるコトもいハぬベくハ命イをシげクなシと重カなりシり

○或時と云言此子六ある抄本子始或時ととみ次三或時とと末二子字なし写本ハ都スミ子字なし類本ハ根ネ尽ツての上ウ一ツの古本ハ始或時とと何り今ハ抄本子役ツ末二子字を補ツ按サシ始と或時とと云イハふ次ツより或時とと云イハふ大被詞子天津罪止云國津罪止と云イハふ又俗の高砂と云謠物子千秋樂ハ民とあハて万歳樂ハ命と延ノと謠イハふ全此と同語勢なりとと斯カクも云イハふハ文選海子於ニ皇舟入漁子ニ徂南極東ニ或屑没ハ於ニ龜鼈之穴ニ或挂ハ於ニ峯ニ或ハ於ニ

洩<sup>コリ</sup>於裸人之國或<sup>ハナカレ</sup>汎<sup>ユク</sup>於黑齒之邦或<sup>ニ</sup>萍流<sup>シヨラ</sup>而浮轉<sup>シテ</sup>回歸<sup>シテ</sup>風以<sup>テ</sup>  
自<sup>ラレ</sup>反<sup>ル</sup>なご<sup>レ</sup>る文勢<sup>ヲ</sup>攄<sup>キ</sup>書<sup>キ</sup>なご<sup>レ</sup>と抄<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>○波<sup>ハ</sup>何<sup>レ</sup>終<sup>ル</sup>海<sup>ニ</sup>  
底<sup>ニ</sup>も入<sup>ル</sup>ぬべ<sup>シ</sup>類<sup>本</sup>も字<sup>ナシ</sup>波<sup>ノ</sup>何<sup>レ</sup>不治<sup>ト</sup>云<sup>ク</sup>荒<sup>ク</sup>  
振<sup>神</sup>など云<sup>フ</sup>何<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>同<sup>シ</sup>土<sup>左</sup>日記<sup>正月十日</sup>海<sup>あり</sup>け<sup>き</sup>ん  
舟<sup>出</sup>ま<sup>ん</sup>又<sup>二月五日</sup>ゆ<sup>ら</sup>り<sup>ぬ</sup>風<sup>吹</sup>出<sup>る</sup>ふ<sup>げ</sup>も<sup>く</sup>尻<sup>へ</sup>退<sup>り</sup>退<sup>る</sup>  
殆<sup>ホト</sup>打<sup>ち</sup>め<sup>つ</sup>べ<sup>シ</sup>云<sup>ク</sup>千<sup>早</sup>振<sup>神</sup>の心<sup>は</sup>あ<sup>ま</sup>海<sup>の</sup>鏡<sup>を</sup>入<sup>る</sup>且<sup>見</sup>つ<sup>ふ</sup>  
る<sup>ぬ</sup>○鬼<sup>の</sup>や<sup>ら</sup>なる物<sup>出</sup>來<sup>て</sup>殺<sup>さ</sup>む<sup>と</sup>。抄<sup>本</sup>出<sup>字</sup>な<sup>し</sup>と<sup>し</sup>  
ま<sup>と</sup>類<sup>本</sup>ま<sup>は</sup>と<sup>に</sup>と<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>鬼<sup>の</sup>更<sup>ハ</sup>師<sup>の</sup>玉<sup>勝</sup>間<sup>十</sup>藤<sup>井</sup>氏<sup>の</sup>勢<sup>語</sup>  
新<sup>一</sup>叙<sup>二</sup>の<sup>三</sup>ガ<sup>四</sup>見<sup>え</sup>猶<sup>松</sup>の落<sup>葉</sup>と云<sup>書</sup>子<sup>変</sup>喻<sup>さ</sup>は<sup>る</sup>由<sup>な</sup>は<sup>バ</sup>此<sup>六</sup>  
る<sup>ハ</sup>畧<sup>ツ</sup>宇<sup>治</sup>拾<sup>遺</sup>卷<sup>六</sup>昔<sup>天</sup>竺<sup>の</sup>僧<sup>伽</sup>多<sup>と</sup>云<sup>人</sup>商<sup>の</sup>為<sup>は</sup>五<sup>百</sup>人<sup>の</sup>

人を卒<sup>サ</sup>船<sup>ヲ</sup>乗<sup>リ</sup>金<sup>の</sup>津<sup>ヲ</sup>行<sup>く</sup>る<sup>ハ</sup>俄<sup>ニ</sup>荒<sup>キ</sup>風<sup>ヲ</sup>逢<sup>ふ</sup>と<sup>ハ</sup>世<sup>ノ</sup>  
界<sup>ヲ</sup>吹<sup>寄</sup>き<sup>て</sup>な<sup>る</sup>ま<sup>じ</sup>ら<sup>る</sup>る<sup>ハ</sup>女<sup>ども</sup>出<sup>來</sup>ぬ<sup>僧</sup>伽<sup>多</sup>  
多<sup>と</sup>を<sup>し</sup>め<sup>る</sup>人<sup>々</sup>の<sup>語</sup>を<sup>付</sup>て<sup>住</sup>る<sup>程</sup>此<sup>女</sup>日<sup>毎</sup>三<sup>時</sup>を<sup>も</sup>  
の<sup>と</sup>晝<sup>寝</sup>に<sup>其</sup>負<sup>の</sup>氣<sup>疎</sup>く<sup>見</sup>ゆ<sup>を</sup>怪<sup>しく</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>は</sup>是<sup>より</sup>先<sup>ニ</sup>  
に<sup>舟</sup>も<sup>な</sup>ら<sup>ば</sup>補<sup>陀</sup>落<sup>山</sup>の<sup>觀</sup>音<sup>を</sup>念<sup>じ</sup>け<sup>る</sup>白<sup>馬</sup>出<sup>來</sup>ぬ<sup>其</sup>乗<sup>る</sup>  
る<sup>海</sup>を<sup>も</sup>時<sup>女</sup>も<sup>忽</sup>ち<sup>十</sup>丈<sup>計</sup>の<sup>鬼</sup>成<sup>く</sup>十<sup>四</sup>五<sup>丈</sup>高<sup>く</sup>  
踊<sup>あ</sup>り<sup>て</sup>叫<sup>の</sup>か<sup>く</sup>て<sup>僧</sup>伽<sup>多</sup>天<sup>竺</sup>に<sup>歸</sup>る<sup>二</sup>年<sup>計</sup>す<sup>ぎ</sup>て<sup>彼</sup>  
女<sup>來</sup>り<sup>僧</sup>伽<sup>多</sup>太<sup>刀</sup>を<sup>抜</sup>て<sup>殺</sup>す<sup>と</sup>す<sup>を</sup>怒<sup>り</sup>女<sup>内</sup>裡<sup>ニ</sup>患<sup>訴</sup>つ<sup>て</sup>  
帝<sup>王</sup>其<sup>女</sup>の<sup>美</sup>顔<sup>を</sup>見<sup>る</sup>召<sup>上</sup>ま<sup>り</sup>共<sup>ニ</sup>臥<sup>せ</sup>ひ<sup>つ</sup>る<sup>ハ</sup>三<sup>日</sup>に<sup>お</sup>り<sup>ぬ</sup>

る朝口は血をほしく世間を見廻らして軒より飛ぶ如く雲に入  
 失ぬ国を見連バ帝王の頭一喰残して有る由今ハ要記をかりか  
 物語は扱かけたるなるほし○來しういこしと訓べきと古板本  
 まきしと作するハ悪し○行末もきくハ抄本もきくあり○海  
 によいまきしに抄本の字なしまきしハ行方も不知さすい  
 失ると云ふ若紫卷藤壺三条宮に罷出ぬ見ても又逢夜稀なる夢  
 の内はやむてまきし我身ともがれ何注し此夢中も我身  
 も消さぬき由なりと云ふ○粮カチツキ尽る草根を喰物とす類本此もと  
 い抄本も字なし加てハ字鏡胡溝反平乾飯也食也類本此もと  
 子四聲字苑訓加礼比於久以食遣人也類考聲切韻云糧

字亦作粮和名加夫行所費米也又云儲食也とるえ万葉卷五常きくぬ道の長  
 手とて終くといのより行可利且となし一云可例比をなしに  
 なし何と古へ旅行ハ乾飯カレヒを持行水はほとばして食しを後  
 錢の通用出來る旅も食物を買ふ其直ソナラシをかきても省てかて  
 も云又食物と直タテかてとも云しなりさて乾飯なりとも旅の食物  
 なるな○いそき方なくを抄本なきと誤まり○おきけなるもの  
 け字一古板本に從く加つ此けハ其様子サマを云言なり抄本もの  
 何の字一同本に從く除つおきつハ俗子オロシといひ  
 氣味ワロシ云意なり夕負卷夕負君の種姓名告とさけへ甚  
 おきけ六条御息所之物氣なり只此枕上夢を見えつる形  
 夕負君絶入る処







ふたつを何の道に定めて赴らせしむるはほしかりありとあり列子  
は五山之根無所連著随潮波上下不待暫時焉と云る即ちよくな  
る○我もやむる山なるをたもて諸本に於てとあるは後  
かゝのやうなとぬれと補つて今二字改めてよくやめしむ○  
天人はよきほひもつる女と河社に此段天孫の海神に宮に到りし  
る時のさまをよめりといふ古事記海神宮段火遠理命即登其香  
木以坐尔海神之女豊玉毘賣之從婢持玉器將汲水之時於井有光仰  
見者有麗丈夫と何と○かぢりといふ和名抄瓦器類子説文云盃鳥管反字  
亦作椀弁色立成金盃類小盃也よ金盃類金椀ハ日本靈異記云其器皆鏡俗  
云未里俗云毛比賀奈万利今按字所出宜用金椀二字落凹物語卷三白銀の金盃一具  
未詳古語謂椀為磨利

枕冊子何てな削氷削氷甘葛甘葛入く新しきかなよりに入るなりと  
あり○船よりかりてハ舟より陸に轉クセルと下と云る然と陸ハ高く舟  
を低くはハ心得るなり今ハ人ハ舟より上るなりと云め舟は  
乗し云ハ舟と出る下と云べきなり卷三大伴大松原子遊  
敷敷がらしがらしと云ハ土佐日記正月十日便よらし三記所三みりて  
ゆゆ推本推本卷白宮長谷詣の故故ある宮宮は人々心して舟  
より下より下ふふなりなりと云ハ中右記玉勝間卷寛治八年八月十五夜  
鳥羽殿月見鳥羽殿月見寄御船寄御船於東渡殿上皇令乗給云夜及三更從御船令上  
給給了了と云ハ御舟と下て御殿御殿上上へへ更更なな給給と云言を忌  
と書けりと書けりと格別の更なと○此山は名を何と申と問ふ



崙山出五色之水と云と云る致○つろくの玉は橋ハ下三卷の火鼠  
裘と入る匣ハコ如く種々の玉を合成アセナシする橋なる由なり○照耀アキラカヤクキ樹  
ハ金銀珠玉の花咲く木なればなり○此採て持て来りて来り  
しハ抄本は従つ此字古本これとあり写本は持てなく印本は  
うてなし○ふらさましははとてハ字抄本は従て補つ種々金  
銀珠玉を取交す甚めづく花咲くもの多うりしほど姫の宣ノリよ  
ひし違タガヒて心は叶ウてハ思オモうすこと其ふらさぬハ佗タおよりハ  
とらうりしほど是を取来しほどなりよとてハ姫の許を貴ウとて云  
言なり○山ハ限なくけしるしハ蓬來山は景色はよびと云と抄  
本はぬりしほど何れと諸本はよりつ○更ナも心もぬりてハ師

云おがつのち心もぬりと云ハ待遠なる意は多く云と云は  
なり此ハ赫映姫はやく逢アりてと云意なり下天羽衣の段天人  
おとしと心もぬりて伊勢物語ハ十段御送ミしてとていかな  
と思ふはけのさざりりと此右馬頭心もぬりて若紫カシ卷十九  
ハ山水に心よりほぬほど内よりけづつおぬりてをぬりても恐  
りばなすと多うると可考蓬來の山はさるるもぬりて甚め  
て心をとどめて能く見まほしく思しとて此玉枝を得てハ  
だ赫映姫は逢アりてとていかなとて本國に歸らむとて思て其  
山の景色はさるるもぬりて心もぬりて舟フネに乗ぬとなり更  
ハ姫の恋しとハ元來暫も忘る隙ハなく候と此玉枝と採得







のきり工古本はくも所は類本の字より今補くもりつ。拾芥抄中末  
 作物所ツクモトコハ在進物所西有別當中内作物所小府も何りり字ノ  
 字と省て呼名目なり。西宮記は改錢云令勘錢文云今書字樣奏聞賜  
 作物所彫定云下鑄錢司云玉勝間卷十引續後紀は承和十五年三月甲子  
 永安門西廊有火云初是作物所冶師行火之所延也。吹上上卷種松  
此体の画を注云是ハ作物所さいつ州人むらり居て沈蕪芳紫檀らして  
 割子折敷ルどもなご色くも造るるも居て合器云も同し  
 物しとひく云是ハ鑄物師の所云ハ鍛冶屋云按云を云き云は云く  
ろしいいもいかかぢぢ皆皆始始作作物物所所とと云云内内ははここももままりり  
 將為光云ははくくもも所所の方方はは於於ももししろろきき洲洲濱濱とと云云りりくく汐汐満満るる形

を作く色く造花をくを松竹云を彫云肩云ももししろろししななごご何何もも○  
 阿や云信云のの字字ももままりりハハ匠匠司司のの姓姓名名なり。拾芥抄中姓姓尸尸部部漢漢部部と  
 あり姓氏録云漢人高安漢人云川内漢人云也也漢部と云姓ハ云ハハハハハハ  
 ○ははくくりりくく仕仕奉奉しし更更ハハてて字字抄抄本本はは役役くく加加つつ○心心ををくくぶぶききくくハハ抄  
 本本はは古古國國とと云云ちちてて類類本本はは五五穀穀他他本本はは五五くくななごご何何るる皆皆誤誤なり。  
 抄抄はは古古國國ハハ此此國國なりと云云此此國國ををココリリニニココククナナゴゴハハ云云ははままハハ  
 ああハハハハハハハハ此此國國をを立立くくハハ皇皇子子はは從從くく蓬蓬來來にに到到りり更更をを云云くくハハ  
 何何るるハハ其其偽偽をを露露頭頭くくハハ何何るるハハ不不合合又又類類本本にに五五穀穀をを斷斷てて  
 何何るるハハ此此はは由由なり假假名名よよててくくとと書書しし古古國國字字音音もも五五穀穀  
 もも誤誤ままりり今今按按ままりりくくととくくままりり誤誤とと脱脱ききるるなり



べ故改つ心を碎くハ此ハ玉枝はくづき工よ心を勞し更なり力  
を尽しハ其細工骨折し心と摧き力を尽す對一云也落凹  
物語卷一ハ何とぞ唯一人して云合べき人もなるは心一と千チな  
して万葉集卷十ハ雨ふれハ瀧つ山川石イハより君之摧情ハとくば君  
心勞ハ掛ハ白宮卷ハ女ハ宮ハ係想二宮年ハ心ハをくづき  
ふめる院の姫宮ハ何と何り○ろくハ祿字ハの音ハなり欽明紀十七  
頻賞祿皇極紀四年ハ將給祿孝德紀二年ハ重其祿天智紀元年ハ褒  
賜爵祿ハ何り君より賜小物と云也是と被物ハと云ハ君より賜物  
大氏絹布衣服と得くかづくより云るなるべし嵯我院卷ハ左大將  
承しハよしのり此神樂ハ更さへの饗ハ更又祿ハ物ハの師ハ樂人ハ  
小也ハ

祿とともむるも賜ふはま布の更なりと定むハ皆さ名のりハ  
何なるもよそ被ハり皆入ぬハぎえハ男公達ハ御衣脱て  
皆くかづけはよそ何と○是とふよりハ類本ハ從つ抄本に  
ふりてハ悪し師ハ云ふハ物と授ハ方ハ付て  
云言ハ賜ハりハ受ハる人ハ付言ハなりと云然ハ  
此ハふよそりハと云べき処なり印本寫本ハ給てハかたるハ何とモ  
分別ハし此詞ハびてと云よしハ兩通なりマヒと約てビ  
マフと約てブとまりマハリと約てハハルと約てブとまりハ土  
佐日記二月五日ハ御舟ハより仰ふふなりハハふふなり○わあちて  
ハ類本抄本ハころま何り他本ハ此言ハし按ハころちての誤

ちよとてし ちをろいもちをよみ 誤て字を脱ぎなり 配分して家子よとせんとかちのけ  
ごハ家子なるよし。伊勢物語 カニ みてつづの飯にとちりてけどの  
器物に盛るるびえてと云るけども同じ。万葉集 卷一 去來子等早も  
やま〜大伴の御津に濱松待恋ぬ〜 卷三 卷九も 同さまあり 子等  
〜ハ妻子奴婢なり〜凡〜自己 オノレ 從者 シヤクフキ を云と師いそ終ま。即家人も〜  
家の子は古言ぬ〜。谷川氏 和訓 栞 説まけごハげすれりや家  
兒なり上総めて下部の叟と云とつひ。余る飛驒國の詞に一家に在  
人を算るま誰の家ハ何人けとなど云と今ハ其家の主從ともよか  
ぞあるに云へども本ハ家子何人なる從者よけと云らんよし。此も  
内麻呂の從て下よけのをもと細工人を云なるよし。按家と古

ヤ 家持とヤ とつふカとケヲ轉てヤ 三宅とミヤケ家と 云と  
カモチ 等一ヤケニヤケ  
かくてヤケコと云らんを省て終まけごと云なるべし 家字の音ハ  
カと云義ハ 散木集注ハ 流しつるけどおと盛敷添 ハアハハヤ  
別考 てきやぶの早苗採ハヤ れげとある哥 の説  
まけごハ家子なり伊勢物語もまけどの器と書と云る 闕疑抄此  
よ〜かちなり箇子 ケゴケゴ 餼子の更〜〜ハ下よ又〜つともの〜云て  
ハ同物重なりと聞〜家子とす。時ハ是も彼も妨なく解安し  
○ふよハきまハ俗ハモラハセウと云意なり  
けねおとむ〜のあ〜ハ何事〜か〜ま  
〜家よ何〜け〜き〜肝き〜  
〜

○かぶきをさるゝ物と怪しと審して其由を思ひ案するさまは  
高麗人源君の相人驚て何あつてひかぶき怪しむ國  
相と考る処に  
其親と成て帝王の上なき位に上るべき相おそしむ人の其方に  
て見れば乱患ふる更やあつて公は固と成て天下を助る方を見  
れば又其相もあつて云々有り。此も玉枝を真物と思居ると  
如此云來るは翁ハ甚く怪しと思ふ有り。師説に居ハ右と同格  
ハ活言も語の終もをり云なりと  
記傳云はつり○我も  
何の氣色もいハたつて更あつてまを現し心もあつて魂も身も  
不副なり。後撰集 恋 一人こゆる心づつてハ其なづら我ハ我も何  
らぬなりと。神卷  
朧月夜君の里居は間ハ源君通ひく在る  
時父大臣源君の帶疊帝を見付くまひし処に

紛るべき方もなきはいづらいつて聞はれども我も何ら  
てあつると。宇治拾遺 卷七 長谷は願て 幸得し条に  
る人此馬急に倒る只死に死ぬるハ主もなきもあつてけしき  
て下て立居りやあつたり○肝きぬて手もちて居るは  
類本は後ハ八字補つ無ても聞はるはすれ言不足とち  
是をかぶきをさるゝ物と怪しと審して其由を思ひ案するさまは  
高麗人源君の相人驚て何あつてひかぶき怪しむ國  
相と考る処に  
其親と成て帝王の上なき位に上るべき相おそしむ人の其方に  
て見れば乱患ふる更やあつて公は固と成て天下を助る方を見  
れば又其相もあつて云々有り。此も玉枝を真物と思居ると  
如此云來るは翁ハ甚く怪しと思ふ有り。師説に居ハ右と同格  
ハ活言も語の終もをり云なりと  
記傳云はつり○我も  
何の氣色もいハたつて更あつてまを現し心もあつて魂も身も  
不副なり。後撰集 恋 一人こゆる心づつてハ其なづら我ハ我も何  
らぬなりと。神卷  
朧月夜君の里居は間ハ源君通ひく在る  
時父大臣源君の帶疊帝を見付くまひし処に



賜さ〜んハ俗ヲモラハウと云々當アテ受方子附ク云言なるハ此  
ワケルカク  
 不叶賜さ〜んハ俗ヲクレウと云々當アテ授方子云言なり此も官  
サケルカク  
 と与アテと仰ら終つるなり。顯宗紀十一ハ授官とあり○御はるひ  
ツラサカケテ  
 と終らしまはるべきハ下御狩行御狩行ハかぢや姫答て奏テウにかの身ハ此  
幸の段  
 國子生終てはるべきと終らひ終らぬとあり。本ハ唯仕るツキ更なるべ  
 かのづうら御娶ミマヒまは更を會フクミ言とち終り。古事記玉垣ハ丹波彦  
宮段  
 多々須道大人玉女ミメメの更と茲二女王淨公民故宜使狹大山祇神女  
の條推古紀の  
 御歌御歌な藤原君卷三春もとの更と年ハ高コト成ナリまで妻もあければ  
と可考  
 人ヒトもつゝぬ人なりぬとて今世もコト妾メカとメシツカヒ、ツカヒ  
 モノたゞと云々同し然サレバ此も御はるひ人ヒトとさるんを脱ヌケきス歟。俊陰

卷俊陰 一人のはるひ人ヒトの〜  
卒後  
 來キつク云々はるひ人ヒトひヒり得ユ〜んやヤに便マシてテたタがガとト何ナニハ  
 常トシに使人シヤクもモ妻妾メカハあア〜終ハて使人シヤクと云例タトヘ引ヒつ人字ヒトナリなりても  
 聞クか終ハハ補ホぎギりリき唯妾メカ〜るべきと云意コトと心得コト〜宜ヨシし○こコ〜じジハ  
エウ  
 要字エウの音ネよヨて俗ソコハホシガルルと云意コトなり。武備志第二百卅一ハ要エウ水ミヅ  
水 不要エウ依イとト足タるルとト異稱イヘン日本傳新猿樂記ハ十四十四脚脚貪欲オンヨク要物エウモノ今昔  
也  
 物語モノガタリハ載ノりリ此物語モノガタリハ籠カゴを作ツク要エウずズる人ヒトに何ナニ〜〜〜  
類多  
 何ナニ〜○此宮ミヤよりハ即スかカ〜や姫ヒメの家イヘと云ト聞クカ此皇子ミコかカ〜や姫ヒメ  
 住ス終ハ〜〜〜ハ宮ミヤ〜ハ云トるルなり。○賜タマフさ〜んと申マウてテるルまマ〜  
 るルべきなりハ抄本セウホンハ終ハ〜〜〜ハ〜〜〜ハ此詞コトバ〜のノよヨぢジ〜聞クカ



思人のくけきまど真と佐とい意ハ通て言ハ異や。を同意と重て云  
更万葉にせらるゝぬらこことなるもあごめしと云はま此も其例なり  
○さびのよと類本にさすのよとある悪うべし書紀に定字あり  
不欺と書いゝとサダカ不貞をサタカナラスと訓いゝ師の古今集  
遠鏡にさびのよと云言をシツカリトと訳されり○まねづまをり  
ハ写本よりなづきてとある悪し。谷川氏云うなづくハ點頭と云項  
築なりと云。遊仙屈に領狀と訓いゝ諾ありと形狀を知らずるな  
と。帚木卷 品定 馬 不繫舟の返り例にげま何やあしとハ傳りぬ  
のよ云バ中将にぬづく又すきまあ〜ん女にハ心持をせぬ〜云  
とすし中將例の〜ぬづく〜と云○心行を〜ハいふおきか

又し思ひおのづ〜晴行を云 心を遣思を遣と云 なりて〜ハ露  
計に残り思の无なり〜と○有つる歌にハ玉枝に附けりし  
る〜の歌なり○ 哥 あら〜の〜とい皇子は艱難辛苦〜海  
を渡り取來りし由を讀述ゆ〜更と眞實と承て玉枝も實に蓬來  
り物〜と思つて見つ〜然りあ〜皆偽更〜唯言語を眞實ら  
る飭ら〜へ〜る玉枝み〜けり〜よ〜なり珠玉ハ物の飭と寸  
る物なりハ飭ま〜玉〜ハ讀るなり。詐字とカザリと訓いゝ。雄略紀九  
条 新羅を伐大將軍紀小弓宿禰彼地〜卒〜と其子兄大磐宿禰  
彼地に到り新小鹿火宿禰の掌る兵馬船官及小官等を執り  
小鹿火 乃詐告於韓子宿禰曰大磐宿禰謂僕曰我當復執韓子宿禰所  
深怨て 掌之官不久也〜ハ韓子宿禰の承諾〜言語と飭詐〜るまで





皆同言なり上るも不達下るも不着中間なるもよひのやの更  
と云と故に迷惑の意不都合なる更不足と俗にテモチフサタ  
と云意はきかぬ更よべなるも云と姓よとしひとを問人  
と書此岸より彼岸より物と橋又と云器物より口中へ渡  
りものど著と云も中間に有意なるべし。濔標巻よ 赤石上住吉詣し  
合ひの意 甚しきなげまば 思惑ふなり 立交敷なるぬ身のいさ  
るぬ更もんも神も見入ぬよきもあべ帰らんも中空なり  
と云と思へし。半字と云へる百も不足十も不足と云へ  
未満よりなり。何い何いよまほと云へるも同意なり。古今集 雑下世の  
めの中 木よあべ草よ何い何竹のよはと云へるも我身の成ぬ

遠鏡よドチラヘモ不 ときと孫姫式よハモ 我身と  
著物ニと記されたり  
あり。後撰集 恋 題より伊勢家集 身は程と志はばとて成ぬ  
つと思へる胸のこころのす。 我身の賤しきを思へば願更も  
と せしと云へるも同意なる更を知へし。伊勢物語 初段よおほほと云へ  
古郷よいやと云へるも在りて在りてを契冲法師ハたまめぬ  
る人の住べきまよふも何いぬ古里よ落着ぬやうもと且ハ憐  
心意よいよ心も感ふなりと云へるよき家よよ人の居るハ  
付くよと荒ゆる宿よ佳人のよハ附なく更なるもぬまよぬ。桐  
壺巻よ 更衣と痴人の 多更と云へるも いやと云へるも又 帝よめされ  
て朝局よ帰  
処 へと云へるも戸をさしと云へるも此方彼方心を合てと云へるも

煩<sup>ワラフ</sup>せぬ時<sup>上</sup>のこゝにまき<sup>上</sup>は迷惑する更なり。帚木

巻<sup>品定段</sup>の歌よむと思<sup>カニ丁</sup>る人のこゝにまき<sup>上</sup>折<sup>上</sup>讀掛<sup>上</sup>るこそ物

しき更<sup>上</sup>なれば返<sup>上</sup>せぬ<sup>上</sup>情<sup>上</sup>なき<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>人<sup>上</sup>のこゝにまき<sup>上</sup>な<sup>上</sup>らん<sup>上</sup>。

出過て歌よむ人なるま<sup>上</sup>面白<sup>上</sup>し<sup>上</sup>も思<sup>上</sup>ぬ<sup>上</sup>る返<sup>上</sup>しき<sup>上</sup>ぶ<sup>上</sup>るも情<sup>上</sup>な

くむ<sup>上</sup>りし<sup>上</sup>とて返<sup>上</sup>きぬ<sup>上</sup>も付<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>る<sup>上</sup>い<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>と感<sup>上</sup>さ<sup>上</sup>なり<sup>上</sup>。若紫<sup>上</sup>巻

北山の聖<sup>上</sup>か<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>なる<sup>上</sup>人<sup>上</sup>驗<sup>上</sup>何<sup>上</sup>もさ<sup>上</sup>ぬ<sup>上</sup>時<sup>上</sup>も<sup>上</sup>な<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>う<sup>上</sup>。づ<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>い

唯<sup>上</sup>なる<sup>上</sup>より<sup>上</sup>い<sup>上</sup>い<sup>上</sup>や<sup>上</sup>や<sup>上</sup>思<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>ぬ<sup>上</sup>く<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>た<sup>上</sup>ん<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>思<sup>上</sup>て<sup>上</sup>信<sup>上</sup>づ<sup>上</sup>。

此<sup>上</sup>聖<sup>上</sup>驗<sup>上</sup>者<sup>上</sup>の名<sup>上</sup>高<sup>上</sup>き<sup>上</sup>と若<sup>上</sup>驗<sup>上</sup>な<sup>上</sup>く<sup>上</sup>て<sup>上</sup>源<sup>上</sup>君<sup>上</sup>は<sup>上</sup>い<sup>上</sup>の<sup>上</sup>え<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>祈<sup>上</sup>ら

ま<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>い<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>陥<sup>上</sup>な<sup>上</sup>り<sup>上</sup>て<sup>上</sup>聖<sup>上</sup>の名<sup>上</sup>を<sup>上</sup>は<sup>上</sup>り<sup>上</sup>成<sup>上</sup>て<sup>上</sup>氣<sup>上</sup>の<sup>上</sup>毒<sup>上</sup>な<sup>上</sup>る<sup>上</sup>更

と出来<sup>上</sup>ず<sup>上</sup>思<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>殊<sup>上</sup>更<sup>上</sup>に<sup>上</sup>忍<sup>上</sup>や<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>は<sup>上</sup>なり<sup>上</sup>。又<sup>上</sup>僧<sup>上</sup>都<sup>上</sup>は<sup>上</sup>逢<sup>上</sup>か<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>し

僧都は逢かつし  
ゆふは

ま<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>い<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>陥<sup>上</sup>な<sup>上</sup>り<sup>上</sup>て<sup>上</sup>聖<sup>上</sup>の名<sup>上</sup>を<sup>上</sup>は<sup>上</sup>り<sup>上</sup>成<sup>上</sup>て<sup>上</sup>氣<sup>上</sup>の<sup>上</sup>毒<sup>上</sup>な<sup>上</sup>る<sup>上</sup>更

と出来<sup>上</sup>ず<sup>上</sup>思<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>殊<sup>上</sup>更<sup>上</sup>に<sup>上</sup>忍<sup>上</sup>や<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>は<sup>上</sup>なり<sup>上</sup>。又<sup>上</sup>僧<sup>上</sup>都<sup>上</sup>は<sup>上</sup>逢<sup>上</sup>か<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>し

ま<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>い<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>陥<sup>上</sup>な<sup>上</sup>り<sup>上</sup>て<sup>上</sup>聖<sup>上</sup>の名<sup>上</sup>を<sup>上</sup>は<sup>上</sup>り<sup>上</sup>成<sup>上</sup>て<sup>上</sup>氣<sup>上</sup>の<sup>上</sup>毒<sup>上</sup>な<sup>上</sup>る<sup>上</sup>更

と出来<sup>上</sup>ず<sup>上</sup>思<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>殊<sup>上</sup>更<sup>上</sup>に<sup>上</sup>忍<sup>上</sup>や<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>は<sup>上</sup>なり<sup>上</sup>。又<sup>上</sup>僧<sup>上</sup>都<sup>上</sup>は<sup>上</sup>逢<sup>上</sup>か<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>し

ま<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>い<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>陥<sup>上</sup>な<sup>上</sup>り<sup>上</sup>て<sup>上</sup>聖<sup>上</sup>の名<sup>上</sup>を<sup>上</sup>は<sup>上</sup>り<sup>上</sup>成<sup>上</sup>て<sup>上</sup>氣<sup>上</sup>の<sup>上</sup>毒<sup>上</sup>な<sup>上</sup>る<sup>上</sup>更

と出来<sup>上</sup>ず<sup>上</sup>思<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>殊<sup>上</sup>更<sup>上</sup>に<sup>上</sup>忍<sup>上</sup>や<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>は<sup>上</sup>なり<sup>上</sup>。又<sup>上</sup>僧<sup>上</sup>都<sup>上</sup>は<sup>上</sup>逢<sup>上</sup>か<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>し

ま<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>い<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>陥<sup>上</sup>な<sup>上</sup>り<sup>上</sup>て<sup>上</sup>聖<sup>上</sup>の名<sup>上</sup>を<sup>上</sup>は<sup>上</sup>り<sup>上</sup>成<sup>上</sup>て<sup>上</sup>氣<sup>上</sup>の<sup>上</sup>毒<sup>上</sup>な<sup>上</sup>る<sup>上</sup>更

と出来<sup>上</sup>ず<sup>上</sup>思<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>殊<sup>上</sup>更<sup>上</sup>に<sup>上</sup>忍<sup>上</sup>や<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>は<sup>上</sup>なり<sup>上</sup>。又<sup>上</sup>僧<sup>上</sup>都<sup>上</sup>は<sup>上</sup>逢<sup>上</sup>か<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>し

ま<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>い<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>陥<sup>上</sup>な<sup>上</sup>り<sup>上</sup>て<sup>上</sup>聖<sup>上</sup>の名<sup>上</sup>を<sup>上</sup>は<sup>上</sup>り<sup>上</sup>成<sup>上</sup>て<sup>上</sup>氣<sup>上</sup>の<sup>上</sup>毒<sup>上</sup>な<sup>上</sup>る<sup>上</sup>更

と出来<sup>上</sup>ず<sup>上</sup>思<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>殊<sup>上</sup>更<sup>上</sup>に<sup>上</sup>忍<sup>上</sup>や<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>は<sup>上</sup>なり<sup>上</sup>。又<sup>上</sup>僧<sup>上</sup>都<sup>上</sup>は<sup>上</sup>逢<sup>上</sup>か<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>し

ま<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>い<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>陥<sup>上</sup>な<sup>上</sup>り<sup>上</sup>て<sup>上</sup>聖<sup>上</sup>の名<sup>上</sup>を<sup>上</sup>は<sup>上</sup>り<sup>上</sup>成<sup>上</sup>て<sup>上</sup>氣<sup>上</sup>の<sup>上</sup>毒<sup>上</sup>な<sup>上</sup>る<sup>上</sup>更





民百姓よて申文をもて參て此管よりと云。六帖第片恋加こらひ

ハ苦しき物と云ふもそれ神よりけりてさききしむけ。宇治拾遺

卷播磨守は仕る貞と云者女の為家守まゝて前呼て問け違ハ

我貞うけ成みりつと悦てなご多うり○人どもぬかハ写本なり

と脱きり○ろくいとぬかハ類本よりくどもと云。皇子のと云せ

ぬかづるを玉枝の偽ありて嬉しき終ハ赫映姫より出き

るぬり○思つるやも有るぬハ姫の要しぬハ更と知て此よ來

つるハ按の如く此より得りと悦ちり○と云ふハせさきぬハ抄

本調をさせ写本と云のハ誤ちり頭書ハ懲ぎさせ致と

云本居翁ハ打擲ハ打ちんと云はハ何と是の未思得こるハ血ぬ

流るまぐと何と枕冊子ハ犬を打擲す處ハ藏人もづつと參りよハ此

翁万目名うちちやとて大島ハはのせハ歸來ハ何のいハ犬

を二人ハとてちやハ死ぬべし流せぬハ歸參りとて

ちやとてぬふと何ハ正しく打擲とちやとて云ハ打と字音ハ

も訓も重て云ハ上ハ早とくハ今俗もうちちやとて云ハ

と宇治拾遺卷三ハ狐恨ハ家ハかハ物も忽ハ何ととむハやハかハや

とぬ物ハ構てちやとてぬハ狐と射殺すハ恨なり物

語書の類ハ物のけちやとてぬハ云ハ更多のハ落四物語卷二ハ中納言ハ

北方清水詣の時ハ三位ハ中將車争しぬハ處ハ北方ハ云ハ遣ハ詞ハこ

とぬやとていくて末ハ女君父中納言にとてぬハとてぬハとてぬハ

処に男君の詞よき<sup>レ</sup>終て後ハ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ほ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>北<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>ぎ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>今  
少<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>唯<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>懲<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>廣<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>打<sup>レ</sup>擲<sup>レ</sup>即  
こ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>猶<sup>レ</sup>懲<sup>レ</sup>字<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>秀<sup>レ</sup>○<sup>レ</sup>祿<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>云  
ハ<sup>レ</sup>皇<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>偽<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>顯<sup>レ</sup>露<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>。吏<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>腹<sup>レ</sup>立<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>匠<sup>レ</sup>等<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>歸<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>隱<sup>レ</sup>待<sup>レ</sup>居  
く<sup>レ</sup>打<sup>レ</sup>擲<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>且<sup>レ</sup>姫<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>皆<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>放<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>捨<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>匠<sup>レ</sup>等<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>空<sup>レ</sup>しく  
逃<sup>レ</sup>失<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>。

か<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>皇子<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>り  
ぬ<sup>レ</sup>。終<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>天<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>り  
空<sup>レ</sup>しく<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>り

○皇子の下ハ字抄本ヲ從<sup>レ</sup>除<sup>レ</sup>つ○す<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>り

ハ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>り○<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ア<sup>レ</sup>メ<sup>レ</sup>ガ<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>タ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>ろ<sup>レ</sup>し○見<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>ハ  
見<sup>レ</sup>字<sup>レ</sup>抄<sup>レ</sup>本<sup>レ</sup>ヲ<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>し○恥<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>歎<sup>レ</sup>息<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>會<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>言  
め<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>吏<sup>レ</sup>哉<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>添<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>段<sup>レ</sup>羽<sup>レ</sup>衣<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>き  
こ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>恥<sup>レ</sup>ぢ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>間<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>皇<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>し  
此<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>聞<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>侮<sup>レ</sup>笑<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>恥<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>吏<sup>レ</sup>哉<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>深<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>恥<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>食<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>と  
○<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>師<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>數<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>幾<sup>レ</sup>柱<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>り  
祢<sup>レ</sup>德<sup>レ</sup>紀<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>宣<sup>レ</sup>命<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>天<sup>レ</sup>皇<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>昔<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>哥<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>語<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ど<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>貴<sup>レ</sup>人  
を<sup>レ</sup>ば<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>幾<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>俗<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>ヲ<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云  
は<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>俗<sup>レ</sup>ヲ<sup>レ</sup>タ<sup>レ</sup>タ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>み<sup>レ</sup>同<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>侍<sup>レ</sup>ふ  
者<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>ナ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>按<sup>レ</sup>赫<sup>レ</sup>映<sup>レ</sup>姫<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>住<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>思



○かゝりぬきまゝに御身を隠しぬよと云更なる所は行かぬ  
とまへ〜聞ゆま字をさしと字誤れ〜の若然なる〜御子けの  
字はの誤〜〇年ごろの年を経てあり月ごろ日ごろなど  
同例の言なり〇見えぬをさけけ〜なりなり一本は後〜なり二字  
補つ〇玉さとの魂タニサカレ避め〜もしひもヌケ抜失心ココロのまけけ〜由  
を云言ちる〜余の飛驒國の言に幼き兒の於よつけゆくほど又  
立反〜い〜もち〜ぬ〜  
三歳ごろなりぬる兒は小便なると漸知らを  
ゆりつゝ又立ちつり洩して衣を濡しな  
ると夕〜ジヤカヘル  
シヤチザなり賤者の言はサと云言をシヤ  
と云と鷲をシヤキ渚をナギシヤ座鋪をシ  
ヤシと云と必此玉さとのと訛〜言ちる〜此皇子の〜  
更〜と御心も〜けを〜成〜と玉の枝ツギ就て〜

あ〜と云言は本縁と云ぬし〜なり山家集恋百十首  
の中ナカにイハほし  
や更〜心のさ〜して〜  
も彼方言も其意よく通てカミ聞か〜り同意の言ちる〜し

追考

○御子ミコの皇子ミコより王ミコより親王ミコと書〜師説シ王ミコハ凡古ハ皇子ミコよ  
と諸王ミコまで通て天皇の直タテけ御子ミコの〜も其御子孫ミコをも姓を  
賜ミタぬ限ハ皆御子と申て王字ミコと書と然と後ノチ親王ミコと申イハ号出来  
〜ハ美古ミコ〜親主ミコとけと申て諸王ミコとハ意富伎美オホキミと申て美古ミコ〜  
申イハぬ更ミコと〜天皇と始奉て皇子諸王ミコまで通オホキミ〜大君オホキミと申  
〜彼王字ミコを音富伎美オホキミとも訓ナリ然シ〜古ハ其御名ミコ子附ナリ某王オホキミと申



時ハ王モ美古トシテ訓ク意富伎美トハ訓ガリシヲ後ハ親王を  
 美古ト申ヒ子別ト專諸王とのト某王トハ書ク其トハ某<sup>ナニ</sup>のおやま  
 こと唱ク親王ト別ツ更トナリ親王ト申号天武紀四年に処子始  
 見也然ども御名の下子附ク某親王ト申更ハ彼御世ハ未<sup>ナニ</sup>有ガ  
 事<sup>ナニ</sup>更ト見え書紀ハ某皇子トシテ何リ續紀至<sup>ナニ</sup>皆某親王  
 少<sup>ナニ</sup>記<sup>ナニ</sup>され<sup>ナニ</sup>り<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>記傳廿二ある云<sup>ナニ</sup>然<sup>ナニ</sup>此物語は<sup>ナニ</sup>比  
 猶<sup>ナニ</sup>字<sup>ナニ</sup>こ<sup>ナニ</sup>書別<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>唯<sup>ナニ</sup>申<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>直<sup>ナニ</sup>の皇子<sup>ナニ</sup>なる<sup>ナニ</sup>も美古ト申  
 ば<sup>ナニ</sup>終<sup>ナニ</sup>バ石<sup>ナニ</sup>作<sup>ナニ</sup>王<sup>ナニ</sup>車<sup>ナニ</sup>持<sup>ナニ</sup>王<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>諸<sup>ナニ</sup>王<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>由<sup>ナニ</sup>キ<sup>ナニ</sup>書<sup>ナニ</sup>ツ<sup>ナニ</sup>る<sup>ナニ</sup>も<sup>ナニ</sup>も<sup>ナニ</sup>也<sup>ナニ</sup>

竹取翁物語解卷二

